

[2020年度 入選]

なぜ人はボディステッチをするのか —縫う行為を通じた自己との対話—

麓 早稀

〈目次〉

はじめに —なぜボディステッチを取り上げるのか

第1章 皮膚表面に施す身体変工の歴史

第1節 文化や社会によって構築される身体

第2節 文化人類学観点からみた伝統的な身体変工

第3節 今日の西洋社会における身体変工

第4節 資本主義市場で「購入」される身体変工

第5節 新たな身体変工の現れ

第2章 日本のメディアで描かれる身体変工

第1節 新聞で表象される身体変工

第2節 サブカルチャーにおける身体変工—『東京喰種 トーキョーグール』から

第3節 それぞれの身体変工の位置づけ

第3章 事例研究 —当事者への聞き取り調査

第1節 調査の概要

第2節 当事者の語り

(1)ピアッシングとリストカットを行うAさん(20代女性)

(2)ピアッシングとタトゥーを行うBさん(20代女性)

(3)アームカットとボディステッチを行うCさん(10代女性)

第3節 それぞれの語りに表れるマスメディア表象との「ずれ」

第4章 なぜボディステッチをするのか

第1節 実践過程における対話性

おわりに

はじめに —なぜボディステッチを取り上げるのか

筆者は、大学生として学びを深める中で「境界策定」というメカニズムに問題意識を抱いていた。境界策定とは、あるものを何かによって区別することである。筆者はとりわけ「自他の境界策定」に関心を向けていた。例えば、趣味について考えるとき、この趣味は本当に「私」が好きなものなのか他者からの影響に過ぎないのか、あるいは自身の身体を見るたびに「私」の身体は一体どこまで「私のもの」であるのか、どこからが他者との境界なのかを考える癖がある。

身近な例を挙げるなら、私たちは皮膚によって外界との境界がつくられている。文化人

類学では、私たちの皮膚は物質的に自他との境界をつくるだけではなく、皮膚から表れる分泌物や排泄物が自他の曖昧な領域に属するために、さらに自他との境界を意識させる特異な存在と考えられてきた。

皮膚は、「私という存在を他者から分かち、それに個別性と肉体的プライバシーを保証する物質的基盤」(谷川 2005:176)の機能を持つ。皮膚によって私たちの「肉」は殻に包まれ、外界との境界をつくるのだ。

そして、皮膚は身体全体に広がる感覚器官としての働きを持つ。毛穴を通じてにおいや汗が発され、嗅覚や味覚の対象となる。そして脈動をすることで聴覚の対象となり、触れられ撫でられることで触覚の対象となる。何にもまして、皮膚は肌の色つやや、しわ、傷や肌理などによって眼差しの対象となる。皮膚から表れる分泌物や排泄物の存在は身体の中にあるときには意識されない。しかし、それが外界に出て他人から意識を向けられたり自身で意識をした瞬間に、「きたない」ものという眼差しとなる。文化人類学者メアリー・ダグラスによる境界理論の視点から考えると、これらが「きたない」と思う背景には、汗や唾が身体から離れたときに「もはや自己の一部ではなく、かといって完全に「非自己」ということもできないような、あいまいな中間領域に位置することになる」(浮ヶ谷 2010:34) ためだとされている。

以上のことから、私たちの身体は、「境界策定」を考えるにあたって最も身近な「境界」の単位として機能していると考えられる。とりわけ「皮膚表面」は、私たちの身体の輪郭(アウトライン)をかたどる部位であり、自己と他者の眼差しの対象となっている。筆者は、その皮膚に意図的に傷跡をつける行為「身体変工」への関心を持つに至った。

筆者は、約2年前「ボディステッチ」という身体変工を知った。「ボディステッチ」とは、皮膚表面を布に見立て刺繍糸を通し、模様をつくる行為である。ハートの縁取りや幾何学



図1 ボディステッチの模様の例(1)
ハート模様、絡み合った鎖の模様が
2色の糸で刺繍されている



図2 ボディステッチの模様の例(2)
薄紫の糸で矢の模様と、薄いピンクの糸で
「I LOVE YOU」と刺繍されている

図1「迷子の行方」：迷子(ブロガー)

図2「ボディステッチ」：沙樹(ブロガー)

的模様など、実践する人々により異なった模様が表れており、様々な色の刺繍糸を選べば、色とりどりの模様になる(図1, 図2参照)。皮膚に直接「傷」をつける行為は「自傷行為」と呼ばれたり、あるいは「ファッションアイテム」として捉えられる。しかし、ボディステッチのように「刺繍」する行為の場合はどのように捉えられるのだろうか。

本稿では、ボディステッチを中心に、皮膚表面における他の身体変工あるいは自傷行為との比較を行う。そして、身体変工を実践する人々の分析を通して、当事者の身体と身体変工の意味付けを考察する。なぜボディステッチを実践するのか、ボディステッチはどのように語られるのか、身体に対する視点がどのようなものであるか明らかにしたい。

第1章 皮膚表面に施す身体変工の歴史

第1節 文化や社会によって構築される身体

身体は、文化や社会によって特徴づけられているものとして、人類学や社会学によって多くの研究がなされてきた。例えば、人類学者のメアリー・ダグラスはアーカイックな社会を取り上げ、身体は、社会構造や社会的カテゴリーによって知覚されイメージされる象徴的なものと述べた。また、身体には社会構造や秩序によって「境界」がつくられ、身体から発される分泌物や排泄物はその秩序から外れあいまいな領域に属するために、タブー視されるということも指摘する。

本章では、皮膚表面における変工を歴史的な観点から考察し、それらがどのような側面を持ち、現在に至るのか考察したい。

「変工」とは、樺山(1996)によると「人為的に手段によってからだに変形をくわえることである。棄損によるもののほか、部分的な器官の形態変更や機能修正をくわえること、あるいは特殊な付加物をあたえること」である。本論文では「身体変工」を、樺山による定義からさらに「皮膚表面における直接的な身体変工」と定義づけ、頭部や粘膜、性器の身体変工を含まないものとする。

第2節 文化人類学観点からみた伝統的な身体変工

マーゴ・デメッロ (2017) は、アーカイックな文化や社会によって構築された身体だけでなく20世紀以降に表れた身体の諸現象も例に挙げながら、階級やジェンダーの視点をもって論じている。

身体変工は、宗教や社会義務といったものと同じく各文化における美しさの基準に見合うために施されたものと指摘している。そして、自身の個人的、社会的アイデンティティを生産、再生産する複雑な過程の一部としてみなされており、文明、文化、人間性のしるし、社会的特徴を象徴した。

また、身体変工には一時的な変工と永久的な変工が存在する。ボディペイントなどは、個人の差異を作り出し特別なものにする儀礼的なものとして一時的に行われた。それに対し、タトゥーや乱刺（皮膚を傷つけた際のケロイドを用いて模様を作る変工）などは、成人のしるし、結婚可能な存在であること、階級やカーストを示すイニシエーションとして用いられた(デメッロ 2017)。

第3節 今日の西洋社会における身体変工

現代西洋社会におけるピアス、乱刺、タトゥーなどは、諸個人が通常の社会秩序の境界の外に踏み出す、オルタナティブなサブカルチャーの一員であることを示すものとしてみなされている。例えばピアスなどは、女性の耳だけではなく、男女ともに耳たぶ、耳の軟骨部分、鼻、顔などに着けられて、装飾目的あるいは性的目的として機能している。西洋におけるタトゥーは、1970年代まで労働者階級の象徴であったが、それ以降は中流階級の人々へ向けた存在へと移行した。日本やインドネシア、ポリネシアといった様々な文化から表れたスタイルなどがタトゥーアーティストによって提供される。その結果、タトゥーの技術や芸術性は向上し文化的に受け入れられつつある身体変工となり、いまや中産階級の人々の内的アイデンティティの可視的な印となった。

労働者階級を示すタトゥーからアイデンティティを示すタトゥーとなった現象の一例として、「ゾンビボーイ」という呼称でしられたリック・ジェネストの存在が挙げられる。彼は、胴体だけでなく顔や頭など全身の80%をタトゥーで施している。レントゲンで撮影したような骨の模様と、虫の模様が描かれている。2011年に行われたメンズ・コレクションのモデルとして採用されるほか、歌手レディー・ガガのミュージックビデオにも出演するなど2019年に亡くなるまで「表舞台」の人間として注目を浴びた。

第4節 資本主義市場で「購入」される身体変工

ミシェル・フーコーは、近代西洋における身体を、医学や精神医学、教育、法律、社会政策といった統制メカニズムを通して規律される媒体として捉えていた。しかし、それと同時に、個人の自己イメージを強化し社会に抵抗する手段として身体は利用されていると言及している。その例として、20世紀後半に展開された「モダン・プリミティブ」と呼ばれる身体変工の展開がある。これは、アーカイックで伝統的な身体変工の信念や技術を、現代の社会慣習に抵抗するために利用するものだ。このムーブメントに参加する人々は、現代社会と伝統的社会のそれぞれの慣習を「疎外的で抑圧的でシンボルが欠如している／本質的で純粹で自然で真に進化している」と二項対立に捉え、より高次の意識へ到達するためにヘビータトゥー（身体中にタトゥーを入れること）などを施している。

しかし、彼らが「本質的で純粹で自然」だと考える身体変工の多くは、資本主義市場で購入する「商品」として身体を消費する行為であり、現代社会の経済システムに依拠するものに過ぎない。また「伝統的」な身体変工の多くは、「西洋帝国主義によって本来それが行われていた地域からは消え」（デメッロ 2017:191）、自由選択的なアクセサリーとして彼らにもたらされている。

このように、モダン・プリミティズムは伝統性というよりむしろカーニヴァル化されたアイロニックな側面を持っている。「カーニヴァル化」とは、ミハイル・バフチンが中世ヨーロッパの民衆的な祝祭の性質を文学にも援用したもののだが、ここではバフチンの理論を応用したジグムント・バウマンの指摘に類似性がある。モダン・プリミティズムを実践する人々は、「伝統的」だとみなす身体変工を「商品」として購入し、「「ほんとうの現実」ではえられないもの」（バウマン 2001:130）と「帰属意識、共同体の一員たる実感のようなもの」（バウマン 2001）を手に入れようとしているのだ。

このことから、皮膚表面における変工は宗教的、呪術的、組織に帰属する集団意識を得

る目的を持っていた。しかし、今日においては資本主義経済の下で、社会に抵抗し自己イメージを強化する個人の目的で実践される「商品」のひとつであることが考察できる。

第5節 新たな身体変工の現れ

本論文の中心となるボディステッチに論を移す。現在、先行研究において「ボディステッチ」という項目は知られていない。しかし、ボディステッチを実践する人々はSNSやブログといったインターネット上に存在している。そこで、人々がどれだけ「ボディステッチ」を知っているか、知ろうとしたかのひとつの指標として、Google Trendsの人気度（検索数）の動向を用いる。日本で2004年から現在に至るまでの「ボディステッチ」の検索相対数を調査すると、2007年9月に「ボディステッチ」というキーワードが検索されるまでは、一度も私たちの目に触れない存在だったということが分かった。そして、2014年4月頃から再び検索され、同年9月がピーク（相対値が100）となった。以降は、月ごとに検索数の多さはあるものの、傾斜は穏やかである（図3参照）。

2014年9月に「ボディステッチ」が著しく注目された結果が表れたのは、漫画とアニメの『東京喰種 トーキョーグール』という作品との関連が考えられる。その理由は、「ボディステッチ」のキーワードと関連して、「東京喰種」、「体」、「矢印」、「ピアス」、そして作品内のキャラクターである「鈴屋^{すずや}什造^{じゅうそう}」などが表れたためだ。アニメや漫画などのサブカルチャーとボディステッチとの関連性は、第2章第2節「サブカルチャーにおける身体変工—『東京喰種 トーキョーグール』から」で触れることとする。

「ボディステッチ」とは、糸を通した針を用いて皮膚表面に刺繍を施すことだ。この行為は、皮膚に直接針を通すことから、モダン・プリミティブな変工として認識されると同時に、自傷行為の一つとして分類されることもある。自傷行為とはリストカット、鉛筆や針を腕にさす、消しゴムで繰り返し皮膚をこすりやけどをつくる、ピアスホールの拡張のように、死に至る傷ではないものの、身体を傷つけることによってネガティブな気持ちを軽減させる目的があるとされている。

これらの自傷行為と比較しボディステッチの特筆すべき点は、ボディステッチには創造的要素も強く見られる点である。当事者が刺繍糸の色を選択し、矢印やハートなどの記号をモチーフに行う点は、現代におけるタトゥーのように芸術性を持った変工であるようにも考えられる。よって、ボディステッチがリストカットなどと同様に自傷行為として捉えられるかは再考の余地がある。

次章では、西洋から現代日本に対象を向け、身体変工を行う若者が様々なメディアにおいてどのように特徴づけられているかを論ずる。

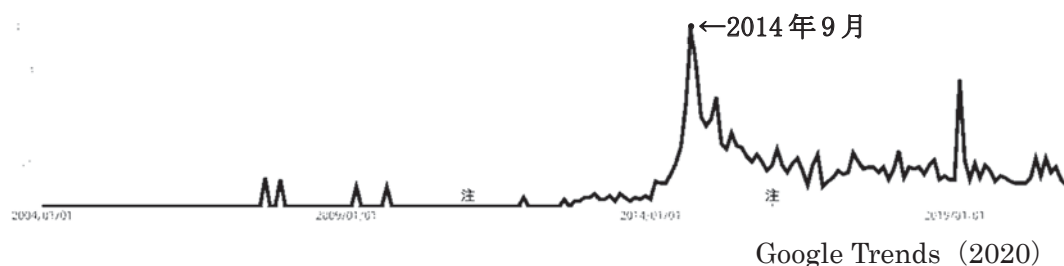


図3 ボディステッチの人気度の動向

第2章 日本のメディアで描かれる身体変工

第1節 新聞で表象される身体変工

亘明志 (1996) は、私たちの身体にふたつの命題があると指摘する。「①人間は身体である (beingとしての身体)」 「②人間は身体を持っている (havingとしての身体)」という分類である。

第1章「皮膚表面に施す身体変工の歴史」第3節で述べたように、現代の身体変工は資本主義市場が根底にあり、「モノ化」しているということを切り離して捉えることはできない。身体の「モノ化」とは、亘が述べる二つ目の命題である。「意思の宿った人間の主体 (subject) の表象としての存在から、意思の外に出され、制御できる物体」 (阿部 2018:29) とみなされることである。制御可能な物体として客体化されることで、身体は消費の対象となるのだ。例えば日本では、外科的な施術による美容整形が行われ、21世紀以後はメスを使わずに変工する「プチ整形」という技法も現れている。

第1章では、現代の西洋社会における身体変工が主な分析対象となっていた。そこで、この章では、日本における新聞や雑誌、ポップカルチャーが身体変工を語るとき、どのような人々がどのような描かれ方をしているか考察したい。新聞や雑誌を選択した理由は、ひとつのテーマに焦点を当てた特集記事が存在すること、読者による寄稿があることから、身体変工に関する世相を客観的に知られると考えられたためである。

調査対象とする新聞は1980年1月1日から2020年12月31日の朝日新聞と読売新聞の記事を参照した。調査キーワードは第1章の先行研究を踏まえ、「皮膚表面」の変工行為に焦点を当てた「ピアス」、「タトゥー」、「リストカット」、「ボディステッチ」とする。「リストカット」を選択した理由は、ボディステッチがピアスやタトゥーに挙げられるようなモダン・ブリティッシュな変工でもあり、リストカットに並ぶ「自傷行為」のひとつとしても認識されるためだ。

「ピアス」は、性器や粘膜部分などの例外を除き、一般的に耳たぶや耳介、へそなどに付けられる。1980年から1989年頃までは、ピアスは主に10代から20代の女性が身に着けるものとされ、イヤリングの代わりに付けられていた。しかし、ピアスに対して「両親からもらった体に傷をつける」親不孝の行為とも捉えられていた。

1990年から2000年頃には、「ピアスをつけた女性/男性」というより「ピアスをつけた「若者」という表現が使われるようになるなど、男女を問わずに「若者」を特徴づける「ストリートファッション」として語られているほか「10代の文化 おしゃれ通し自分探し」という特集が組まれるなど、若者がピアスを通して自己表現する姿が描かれる。とりわけ男性の場合ファッションアイテムとして身に着けるだけでなく「ピアスで男を誇示」することもある。例えば、ピアスの数の多さ、ピアスホールの大きさで、「友達同士でどれくらい痛みをがまんできるか」を競い、個をアピールする機会にもなっているのだ。また、ピアスは「茶髪」という要素と関連性が強く、その多くは「今どきの若者」像として描いたものである。「茶髪」少年の意外な優しさ」という見出しで投書されるなど、ピアスをしている若者の外見は、一見すると品行方正さに欠ける姿だという位置づけと考えられる。2000年から2006年頃まではピアスと若者とを結び付ける記事が見られるが、以降は記事が減少していることから、ピアスは社会現象として著しく注目される対象にならなくなったと考えられる。

「タトゥー」は、「入れ墨」「彫り物」といった呼称で刑罰の目的で施されたり、限られた

組織内で愛好されているものだった。1980年から1988年頃までは、音楽や演劇の題材として取り上げられた。1989年には、入れ墨を使った美容術を行った女性が逮捕されたり、「入れ墨メイクをしていた女性経営者」が医師法を違反して美容施術をして問題視されるなど、入れ墨、入れ墨を実践する人々と犯罪行為との関連性が持たれ始める。しかしながら、1999年頃から「入れ墨」が「タトゥー」と表記され始め、「今どきの若者」という特集のなかにタトゥーが組まれるようになる。手彫りではなくタトゥー・マシーンが普及され始めたことで、若者の間で「ファッション感覚」で行われるようになったのだ。一般的に、タトゥーはピアスと比較すると「消えずに一生残る」不可逆的な身体変工とみなされる。「取り外し可能」な手法として、タトゥーシールを手にする若者もいる一方で、「(タトゥー)シールは安っぽい」とタトゥーに「本物さ」を求め、その不可逆性が意義深いものとして捉えられている。2012年に大阪市環境局職員が入れ墨を施していたことで再びタトゥーが問題視され始めるものの、2015年以降は訪日客が増加していることを踏まえ「タトゥーOK」の浴場が表れ始めるなど、タトゥーに対する位置づけがファッションアイテムに近いものとなる。

2020年に1643人の男女を対象に行われた朝日新聞の調査によると、銭湯で刺青やタトゥーを施した人がいた場合に（その存在が）「気になる」と答えた回答者は63%と全体の半数以上であった。しかし、「気になるが、拒否の必要はない」回答者が31%、「気にならず、拒否の必要もない」の回答率は14%であったことから、タトゥーが実践していない人にとって「目に付く存在」であるものの、反社会的な人々のみが行っているという視点が薄れつつある。

「リストカット」は、1980年代から急増している「症候群」として語られ、1990年頃から新聞記事に取り上げられている。その多くは10代や20代の「思春期の女性」が「衝動的、発作的」に繰り返し行っているとみなされ、家族間のコミュニケーションが不和したことが要因とされている。リストカットは必ずしも自殺に直接つながるのではなく、「自分の苦悩を人に分かってもらいたかった」、「自分を傷つけることで存在感を確かめたかった」、「イライラして何かを傷つけたかった」ことが動機となる。また、手首を切ったことを覚えていない場合もあり、計画性より衝動性が高い行為とみなされる。2003年11月に朝日新聞では「自傷をする若者たち」という題で特集が組まれ、家庭環境に苦しむ女性たちがリストカットをする内容が伝えられるなど、「若者」のなかでも殊に「女性」に、リストカットとの強い関連性があることが描かれる。

以上のことから、マスメディアにおける「ピアス」と「タトゥー」は、1990年代から男女を問わず「若者」が身に着けるあるいは施す「自己表現」の一環として捉えられ、いる。とりわけ男性の間では、ピアスの数や穴の大きさを男性性を主張する機会になっている。しかし、そういった「体を張った」行為が見受けられるものの、ピアス自体は「取り外し可能」なファッションアイテムの要素が強く、衣服のように記号的な身体変工であるとも考えられる。ピアスに代わりタトゥーの場合は「一度彫ってしまえば戻れない」象徴的なものでもある。タトゥーシールのように「取り外し可能」な変工も若者に親しまれているが、一方でタトゥーの本質ではないとみなされる。しかし、どちらの変工もモチーフや絵柄をアクセサリショップあるいはタトゥースタジオなどの市場で「選んで」身に着けたり、施術してもらう。マスメディアにおいては「ファッション感覚」で施される「消費行為」として描かれている。

また、これらで描かれる「リストカット」は、若者の中でも「女性」がするものでありネガティブな気持ちを消化させる「自傷行為」として捉えられている。リストカットをする人々は「精神疾患患者」と結び付けて考えられる対象である。

なによりも特筆すべき点は、「ボディステッチ」に関する記事が存在しなかったことだ。筆者が第1章「皮膚表面に施す身体変工の歴史」第4節で指摘したように、ボディステッチは身体変工の中でも人々に広く知られていない存在であると考えられる。

しかし、Google Trendsでの調査では、2014年以降に「ボディステッチ」が突如として関心を向けられている。それはなぜだろうか。その理由のひとつに、ボディステッチを実践した人が登場する漫画作品『東京喰種 トーキョーグール』が関係していると考えられる。次節では『東京喰種 トーキョーグール』に焦点を当て、メディアとしての漫画がどのようにボディステッチを描いているか考察する。

第2節 サブカルチャーにおける身体変工—『東京喰種 トーキョーグール』から

次に、漫画作品『東京喰種 トーキョーグール』における身体変工とりわけボディステッチの表象を考察したい。『東京喰種 トーキョーグール』とは、現代日本を舞台に、人間とその人間を食らう「喰種」、事故により半分喰種になった主人公をテーマとした作品である。2011年9月から2014年9月に第1部が、同年10月から2018年7月まで第2部が漫画作品として連載された。また、漫画の連載だけではなく4シーズンに分けてアニメ化もされ、1シーズン目は2014年7月から9月の2ヶ月間にわたり放送された。

Google Trendsでの調査で、2014年9月に「ボディステッチ」が顕著に注目された結果が表れたのは、漫画とアニメの『東京喰種 トーキョーグール』が連載、放送された時期と重複しているためだ。「ボディステッチ」のキーワードと関連して、「東京喰種」、「体」、「矢印」、「ピアス」、そして作品内のキャラクターである「^{すずや じゅうぞう}鈴屋什造」などが注目されている。

この作品には、ボディステッチだけでなく特徴的な身体変工を施したキャラクターが存在する。それは、ウタと鈴屋什造だ。ウタはモダン・プリミティブを、そして鈴屋什造はボディステッチを実践している。ウタは耳や目元、口元に複数のピアス、そして身体にタトゥーを施している喰種だ（図4参照）。喰種は人間を食べる存在であるため、作品内では主人公に対し「敵」の立場とされる。彼の容姿はモダン・プリミティブだが、その言動は穏やかな点が特徴的である（図5参照）。

鈴屋什造は、首や胸元、腕の外側、目元などに赤い矢印模様のボディステッチを「趣味」で施しており（図6、図7参照）、ウタとは相反して喰種を駆逐する警察組織の一員である。よって、作品内では「味方」に近い立場とされる。しかし、彼は愛玩動物として去勢された過去から感情や痛覚が欠落しており、他者に対しても攻撃的、破壊的な言動で振る舞う（図8参照）。彼がボディステッチをする様子を他人に見せる場面では、ボディステッチを「華やか」「お気軽」と説明するなど、ボディステッチをファッションアイテムのように位置づけている。

『東京喰種 トーキョーグール』では、ウタのように過度な身体変工を施す人物に攻撃性を結びつけるというよりも、男性性、痛覚、感情を失った人物に攻撃性があることを描いている。また、多くのマスメディアがリストカットに対して「女性」の行為とみなすように、ボディステッチには「非男性性」を象徴していると考えられる。



図4 ウタの登場シーン



図5 ウタの言動



図6 鈴屋什造のボディアステッチ

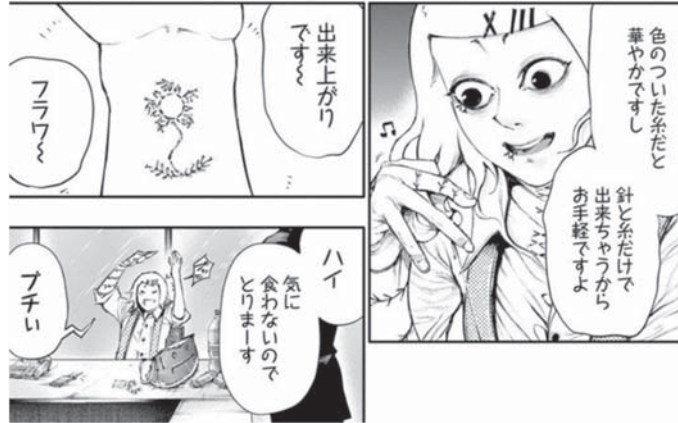


図7 鈴屋什造がボディアステッチをする様子



図8 鈴屋什造の言動の例

図4 『東京喰種 トーキョーグール』リマスター版2 巻42 ページ:石田スイ(2013)

図5 『東京喰種 トーキョーグール』リマスター版2 巻48 ページ:石田スイ(2013)

図6 『東京喰種 トーキョーグール』リマスター版6 巻8 ページ:石田スイ(2013)

図7 『東京喰種 トーキョーグール』リマスター版6 巻9 ページ:石田スイ(2013)

図8 『東京喰種 トーキョーグール』リマスター版5 巻174 ページ:石田スイ(2013)

しかしながら、鈴屋什造が施すボディステッチの部位は、ウタのピアスやタトゥーの部位と一致する部分も多い。よって『東京喰種 トーキョーグール』における身体変工は、ピアスであれ、タトゥーであれ、ボディステッチであれ捉え方に大きな差異がないように考えられる。

次節では、これまでのマスメディアの表象分析を踏まえ「ピアス」、「タトゥー」、「リストカット」、「ボディステッチ」の四つがどのような身体変工として描かれているか、いくつかの性質をもとに分類する。

第3節 それぞれの身体変工の位置づけ

これまで、「ピアス」、「タトゥー」、「リストカット」、そして「ボディステッチ」がマスメディアやあるいはサブカル（チャー）メディアにおいてどのように表象されてきたのかを分析した。これら4つの身体変工は皮膚表面に施すものでありながら、性質が異なっている。また、それを実践する人々の表象も異なっていることが示唆できる。よって、幾つかのカテゴリーに分けて考えることができる。

この節では、メディアが描く変工それ自体のイメージを2つの視点で分類する。

1点目は、「イメージ性」の視点だ。これは、「身体変工それ自体の大まかな正負のイメージ」と定義する。ピアッシングやタトゥーは呪術的で儀礼的な変工として存在してきたが、今や服を着るように「ファッション感覚」で身に付けられ、若者文化のひとつとして捉えられつつある。とりわけ、タトゥーが「彫り物」ではなく「タトゥー」という呼称で人々に親しまれることで、反社会的なイメージが薄れてゆき、「オシャレ」なポジティブイメージをもたらすアイテムへと変貌している。『東京喰種 トーキョーグール』におけるピアスとタトゥー、ボディステッチも同様である。それら自体が「オシャレ」なものと直接描かれてはいないが、キャラクターを際立たせるひとつの「華やか」な「モチーフ」として存在している。それに対し、リストカットは身体を消費し着飾るというよりも衝動的に身体を傷つける「自傷行為」として捉えられる。また、繰り返し変工する様子を「リストカット症候群」と名付けることから、リストカットをネガティブな変工として位置づけていると考えられる。

2点目は、「実践性」の視点だ。これは、「身体変工を完遂させるために市場を介して行うか」と定義する。この視点は、身体を「モノ化」して消費する行為にも類似性がある。例えばピアッシングやタトゥーは、数多くあるモチーフや絵柄から選択し貨幣と交換することで実践できる変工である。それに対し、リストカットやボディステッチは市場で貨幣と交換する消費行為ではない。「リストカット屋さん」「ボディステッチ屋さん」といった、変工を目的とした経済的やり取りは存在しない。手首を切る刃物や刺繍針や糸を「一般的な用途」から外れた使い方をするためだ。これらふたつは、自分自身で実践する必要がある「自己実践」的だと考えられる。

以下に、マスメディアやあるいはサブカル（チャー）メディアにおける「身体変工自体の位置づけ」の図を示す。（図9参照）

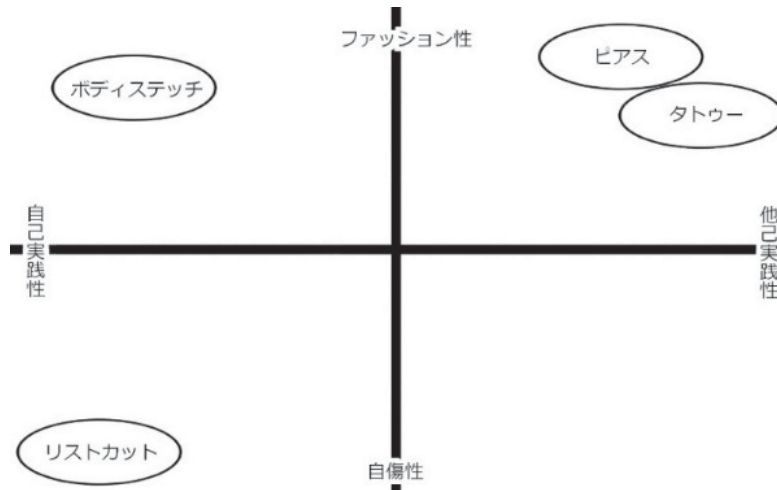


図9 メディアに描かれる身体変工の位置づけ

（麓：2020年作成）

第3章 事例研究 当事者への聞き取り調査

第1節 調査の概要

第2章第1節と第2節では、マスメディアで描かれる身体変工とそれらを実践する人々の分析を行った。そして第2章第3節では、それらの分析を基に各身体変工を性質ごとに分類した。

そこで本章では、実際に身体変工を実践する人々を対象にライフヒストリー分析による調査を行う。ライフヒストリー分析とは、「個人の人生、すなわち、その人の過去から現在にいたる体験および主観的な意味づけの記録であるライフヒストリーのデータを第一次資料として、新たな知見、仮説、理論を構築する研究の方法」(谷 2009:90)である。この調査により、第2章で分析したマスメディアでの身体変工の表象と、当事者の身体変工の捉え方に差異や共通点があるか明らかにする。

この調査では計3人の女性に協力を得た¹。1人目はピアッシングとリストカットをするAさん、2人目はピアッシングとタトゥーをするBさん、3人目はアームカットとボディステッチをするCさんだ。

この3人のライフヒストリー分析を行う上で、特定の質問事項は設けず、チャット形式の会話ツールを用いた。一般的に、質的調査を実施するにあたりチャット形式ではなく対面で行うことが主流である。しかし、チャット形式とした理由は2点ある。1点目は、筆者は身体変工をセンシティブなものと考えたためだ。例えば、ボディステッチが新聞記事では描かれていないのにもかかわらず、SNS上や個人ブログ上では見かけられる行為である。このことから、対面ではなくむしろ文字だからこそ当事者は感情を吐露していると考えられたためだ。よって、条件を一致させるため、全ての調査対象者をチャット形式に統一した。

2点目は、チャット形式の会話ツールは非同期コミュニケーションツールとされているためである。非同期コミュニケーションとは、電話や対面での会話のように即座に返事をせずとも、時間を置いて対応が可能であることだ。よって、当事者が過去の経験を振り返

る中で特定の内容を思い出しても、迅速な返事を必要としないため感情を述べやすいと考えられた。また、当事者と会話するうえで口語的な文体や「絵文字」を用いることで、対面調査の長所を活かし、当事者の感情を分析しようと考えられたためである。非同期会話といっても、Eメール形式ではなくチャットツールとした理由は、Eメールと比較して対面の会話により近い調査だと考えられたためだ。チャットは「断続的な会話」つまり自身の経験を小刻みに書くことができ、自分の経験を振り返りながら語ることができる。よって、チャット形式の会話ツールを用いたライフヒストリー分析は適当だといえる。

第2節 当事者の語り

(1) ピアッシングとリストカットを行うAさん(20代女性)

Aさんはピアッシングとリストカットを実践している。彼女は「ピアス」の中でも、ピアスホールをさらに広げる「ピアス拡張」を実践している。中学生頃から「人生の躓き」を感じ、そのストレスの発散にリストカットをし始めたが、社会人として働くようになってからは主にピアス拡張と美容整形をしている。現在はリストカットを完全にやめたわけではなく、飲酒時に「手持ち無沙汰」と感じると手首を「軽く」切っているそうだ。

彼女は自身のピアス拡張やリストカット、美容整形といった変工をどのように意味づけているのだろうか。

「(ピアス拡張は)むしろ自傷以外になにがあるんだ?!って私の中ではおもってます。

人によってはオシャレのためにやるんでしょうけど、わたしキラキラの可愛いやつ付けたい!とかなくて、ただ広げたくてしてます(汗をかきながら笑う絵文字)」(図10参照)

「耳たぶ程度のピアスはオシャレの一環というイメージはありますが、軟骨は引く!と同じ感じだと思います。なので軟骨は普段隠してますね。」

「わたしは今の自分から変わりたいくてどうしようもなくピアス拡張したりメスを入れたりする 全くポジティブではない」

「痛みが幸せっていうのもわかります、苦しい〜→痛み→Happy!みたいな。

特に体が変わると生まれ変わった気になるんですよね。とにかく生まれ変わりたい、今のままじゃ居られないからピアス等に走るのかなあ、と思ってます。」

「ピアスはタトゥーと違って場所によっては年単位で痛いので満足感ありますね (ピースサインの絵文字)」

「なりたい姿は特にないです!」

「中学生の頃は金がなかったのでただ単にリスカしてましたが、今は金があるのでピアスしたり美容整形したりで発散してます。負から一気に正になる麻薬」

「(リストカットをやめたのは)社会的にしちゃいけない、マイナス要素が多いからしなくなる、って言うのはあると思いますよ。」

「(ボディステッチは)素敵だとは思いますが、自分がやろうとは思わないかな〜衝動的に出来なそう」

むしろ自傷以外になにがあるんだ？！って私の中
ではおもってます。人によってはオシャレのため
にやるんでしょうけど、わたしキラキラの可愛い
やつ付けたい！とかなくて、ただ広げたくてして
ます 😊

図10 Aさんによる身体変工に対する語り

調査日：2020年7月10日

(2) ピアッシングとタトゥーを行うBさん(20代女性)

Bさんはピアッシングとタトゥーを実践している。彼女は高校生頃から「スクランパー」と呼ばれる牙を模した部位にピアスを開け、21歳頃にピアス拡張を始めた。現在は主に手の甲、首、腕などにタトゥーをしている。

彼女は自身のピアス拡張やタトゥーにみられる変工をどのように意味づけているのだろうか。

「タトゥーは元から見てるの好きで憧れがあって、周りと違う自分になりたいくて、個性出
したくて派手髪（※髪を奇抜な色に染めること）もピアスの拡張もタトゥーも始めたなあ。」
（図11参照）

「私の場合は好きなモデルさんが派手髪しててこんな風になりたい！→好きなアニメ
キャラと同じ髪色になりたい！とかそんな理由だったなあ」

「タトゥーは彫ってる時は痛いけどこの痛みを我慢したらもっとかわいくなれるって気
持ちで毎回やってる（ハート付きの笑顔の絵文字）笑」

「（ピアス拡張をやめたのは）もうハタチになるからこういうのやめようって思ってふさ
いじゃった。結局ハタチになったらタトゥーに興味が移っちゃっただけなんだけど笑」

「私結構ビビりで家も厳しくて、次タトゥー入れたら絶縁するって言われたりピアス増や
さないでって言われてるんよね笑」

「（ピアスの）拡張は髪の毛で隠してた笑」

今はもうしてないけどピアスの拡張
やってたなあ。後は身体改造じゃ無
いけど派手髪とか。

タトゥーは元から見てるの好きで憧
れがあって周りや違う自分になりた
くて、個性出したくて派手髪もピア
スの拡張もタトゥーも始めたなあ。
タトゥーは彫ってる時は痛いけどこ
の痛みを我慢したらもっと可愛くな
れるって気持ちで毎回やってる 😊 笑

図11 Bさんによる身体変工に対する語り

調査日：2020年12月3日

「(タトゥーをし続けるのは) 私の腕可愛いでしょ～！って見せびらかしたいがために見える位置に彫ってる笑」

「完璧自己満(※自己満足)」

(3) アームカットとボディステッチを行うCさん(10代女性)

Cさんは、アームカットとボディステッチを行っている。「リストカット」が手首に限定した変工行為であるのに対し「アームカット」は腕全体の変工である。

Cさんはアームカット、ボディステッチといった身体変工をどのように意味づけているのだろうか。ボディステッチは、どのような位置づけで実践されているのだろうか。

「私はなんとなく軽い気持ちでボディステッチを始めました。アームカットもしていて、自分のことも大事ではなかったし多少痛くてもどうでもよかったので、Twitterで偶然ボディステッチを見かけてやってみて、そうしたら器用さもあってそこそこうまくできたのが嬉しくてアカウントを作ってみて～って感じです。」

「多少のストレス解消にもなったので、腕切るよりは生産性があるかなあとも思って、アームカットをしなくても耐えられそうな微妙な時でかつ時間のある時にボディステッチをしていました。」

「私は弱いからアームカットをしたんですよ。出来なくても生きていられるならそれがいいです。」

「(ボディステッチに) 一番ハマってた時はなにもかもに絶望していて惰性で生きていたので、もう少しの人生の暇つぶしくらいのつもりでもありました。どんなものを縫おうか日中にあれこれ考えるのも、旅行前の支度みたいな気分でした。」

「(『東京喰種 トーキョーグール』の鈴屋什造もボディステッチをしているけれど) 漫画を理由にして、自分がどういうつもりでも自傷と言えることをするのは漫画や作者や読者に対しても冒涇のようにも思えてしまうので、私はボディステッチとあらゆる漫画やアニメとは、Twitterでは匂わせないように一応気を付けています！」

「ボディステッチはどちらかというと暇つぶしが9割って感じで、自傷という感じではあまりないというか、でもファッションでもなく…説明しにくいですね…」

「なんなんだろう、人には言い難い趣味のひとつのような…ピアノを弾くのと大差ないような感覚??です！」(図12参照)

ボディステッチはどちらかというと暇つぶしが9割って感じで、自傷という感じではあまりないというか、でもファッションでもなく…説明しにくいですね…なんなんだろう、人には言い難い趣味のひとつのような…ピアノを弾くのと大差ないような感覚??です！

図12 Cさんによる身体変工に対する語り

調査日：2020年12月10日

「ボディステッチをするときはもうひたすらどこに糸を通せばきれいになるかぶれないかとか、どの辺りだと血が出ちゃうか、どうすれば一筆書きできるかとか、そんなことばかりウキウキ考えて、それで頭をいっぱいにしています」

「何も考えてないと情報の波であたまがおかしくなりそうだったので、今思えばボディステッチに集中することもその対処法のひとつだったんですね」

第3節 それぞれの語りに表れるマスメディア表象との「ずれ」

第2章第3節「それぞれの身体変工の位置づけ」で、マスメディアやサブカルチャーが身体変工をどのように表象しているか分析を行った。前章での調査を踏まえると、3人の話から分析結果に対する共通点と相違点が見受けられた。

はじめに、共通点を述べる。AさんとCさんの話にもあったように、リストカットやアームカットは「衝動的」にできる「自傷行為」とみなされている点だ。いずれも自己実践性がある。

そのほかの身体変工における捉え方は、各当事者により意味付けが異なっていた。しかしその捉え方に相違があれども、当事者は身体変工を「外側」へ眼差しを向ける手段にするというよりもむしろ「当事者自身（「内側」）に眼差しを向けている」という新たな視点を得られた。先行研究によれば、身体変工は社会に「抵抗」するための「逸脱」行為にもなりうるとされていた。つまり「抵抗」とは、当事者が社会や他者といった「外側」へ向ける眼差しでもある。しかしそうではない。当事者らは、身体変工を通じて自分自身という「内側」に強い眼差しを向け、社会や他者との間で自分がどのような存在であるかを再認識しているのだ。

Aさんから順に聞き取り調査の考察を行う。Aさんにとって身体変工は「ファッション」ではなく「衝動的」に行う「自傷」である。ピアスのモチーフを選択し実践するような「他己実践的な消費行為」ではなく、「自身の身体が変わること」「変身すること」を重要視しており、とりわけ身体変工で得る「痛み」は「変身」するための儀礼としてなくてはならないものである。しかし、Aさんは特定の「なにか」になりたいわけではない。

彼女は、自身がピアスすることの意味付けをネガティブなものと認識しており、「ピアスを楽しむために付ける他者」とは違うことを自虐的に語る。また、耳たぶに付けるピアスはファッションアイテムとして、軟骨部分など痛みが強い部位は「自傷」行為とみなしている。Aさんは現在タトゥーを実践していないが、胸元など「服で隠れるところ」には施してみたい、との語りから、Aさんにとって身体変工は「自傷」行為の一環であり、「通常他人には見せない」部位に実践すること、そして「隠す」ことに意味があると考えられる。

これまでの章で行った分析では、身体変工には自己表現の目的があると示されてきた。つまり、身体変工をするにあたって「なりたい姿」があるように考えられていた。しかし、Aさんのように「なりたい姿」はないが「変身」をし続けるために身体変工を繰り返す例もあるのだ。

Bさんにとって身体変工は「周りと違う自分になる」「もっとかわいくなれる」行為である。「他己実践的な消費行為」であるタトゥーに憧憬し、集団の中で「個」を主張できる手段を実践した。身体変工で得る「痛み」は「かわいくなれる」ために耐えるものであり、「痛み」を貨幣のように支払っている。そしてBさんの場合はAさんとは異なり、身体変工を通じて実在のモデルやアニメのキャラクターといった「なりたい姿」があり、腕のタトゥーも「見せびらかす」場所に彫っている。よって、これまでの分析と一致している点がある。彼女は、自

身の身体変工と身体変工に伴う痛みに対して「より可愛くなれるための行為」と認識している。また、文末に多用する「笑」からはにこやかさがあり、Aさんのような変工へのネガティヴ性が薄い。しかし、彼女は自身のタトゥーに「メンテしたい」、つまり彫った部分をもう一度彫りなおし再びその模様を身体に刻みたいことを語った。一度の変工ではなく、繰り返し刻みなおす行為はマスメディアで語る「リストカット」にも類似的である。

しかし、Aさんが成長する中でリストカットをやめたように、Bさんもピアス拡張をやめている。2人が変工を一時的にやめたきっかけには共通点が見られる。それは、それぞれの身体変工が「社会的にしてはいけない行為」なのだと感じ、実践をやめた点である。「ハタチ」という一般的に「大人」と認識される年齢になったときに、ピアスの穴を「ふさいじゃった」のである。「ふさいだ」のではなく、「ふさいじゃった」と述べる点からも、それが示唆できる。Aさんと同様に新たな身体変工を実践したり「こっそり」行うことで、変工し続けている。

Cさんは、リストカットではなく「アームカット」を実践しており、Aさんと同じく「自傷」のひとつとして意味づけている。ボディステッチは「自傷」行為ではなく「ファッション」でもなく「暇つぶし」であり、それと同時に、アームカットをしたくなる寸前で押し留まるための行為でもある。

また、筆者は第2章で、ボディステッチへの注目に漫画作品『東京喰種 トーキョーグール』が関連していると分析した。しかし、Cさんは『東京喰種 トーキョーグール』を含めた漫画作品をきっかけにボディステッチを行うことはむしろ冒流的だとし、関連性を否定している。Cさんは鈴屋什造が施している特徴的な矢印模様の刺繍をせず、手のひらにオリジナルの模様を作っている。このことから、ボディステッチを見せるための「ファッションアイテム」、「コスプレ化」させない行動だと示唆できる。「人には言い難い趣味」と位置づけ、ポジティブなイメージを付与しないようにしているのだ。

AさんやBさんは、自傷的であれファッション的であれ、身体変工を通じて「変身する」ことを目的としている。そして、身体変工で得る「痛み」も、「変身する」ための重要な過程としてみなしている。対照的に、Cさんの場合は「変身する」ことが目的でないため「痛み」を特別なものとして位置づけていないと考えられる。ボディステッチは「暇つぶし」であるとともに、自らを「情報の波」という外的要因から切り離すことに強い意味を見出している。

身体変工を「通常人には見せない部位」に実践したり、「こっそり」行ったり、「人には言い難い趣味」と語っていることから、Aさん、Bさん、そしてCさんは「自らの身体変工が社会的にしてはいけない行為」と認識していることが示唆できる。とはいえ、当事者が自身の変工を「抵抗」する行為だとみなしているのだろうか？

しかしながら、身体変工を「隠す」ということは他者からの眼差しを受けることはなく当事者のみがそれらを眼差しの対象に置くことができるという意味でもある。当事者は「内側」へ眼差しを向け、自身との対話に意味を見出しているといえないだろうか。

以下に示す図は、当事者3人の属性、実践行為、ライフヒストリーを通じて得られた変工の捉え方である。(図13参照)

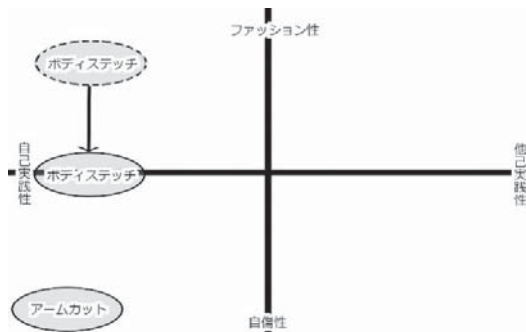
	属性	実践行為	変工に対する捉え方
A さん	20 代女性	リストカット ピアス拡張 美容整形	自傷行為 変身行為
B さん	20 代女性	ピアス拡張 タトゥー 2	個性を出す 可愛くなる 変身行為
C さん	10 代女性	アームカット ボディステッチ	自傷行為 暇つぶし 人には言い難い趣味

図 13 当事者の属性と実践行為の図表

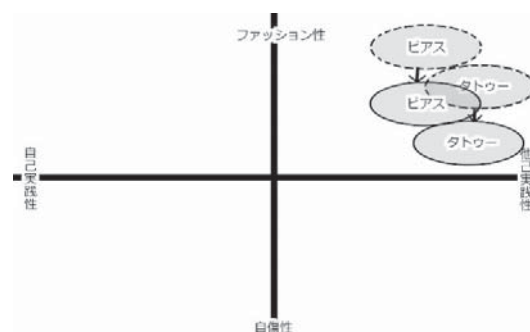
（麓：2020 年作成）

また、以下3枚は、第2章で示した身体変工の位置づけを応用した対比図である。調査で得られた各当事者の身体変工の位置づけである。破線部は前章での位置づけを示し、実線部は本章で得られた分析結果である。（図 14, 15, 16 参照）

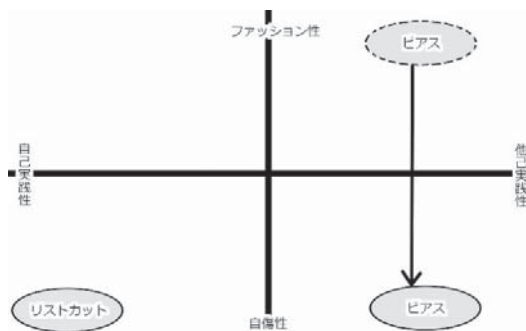
次章では、これらの比較検討を踏まえボディステッチの性質を論ずる。



（図 14）A さんの身体変工の位置づけ



（図 15）B さんの身体変工の位置づけ



（図 16）C さんの身体変工の位置づけ

（麓：2020 年作成）

第4章 なぜボディステッチをするのか

第1節 実践過程における対話性

これまで、ボディステッチ以外の身体変工と比較検討し、マスメディアやサブカルチャー、そして当事者がどのように位置づけを行っているかを検証した。本章ではボディステッチに焦点を当て、ボディステッチがどのような性質を持つのか再検討を行う。

第3章で、ボディステッチの当事者であるCさんはこのように語っていた。

「アームカットをしなくても耐えられそうな微妙な時でかつ時間のある時にボディステッチをしていました」

「ボディステッチはどちらかというと暇つぶしが9割って感じで、自傷という感じではあまりないというか、でもファッションでもなく…説明しにくいですね…」

「ボディステッチをするときはもうひたすらどこに糸を通せばきれいになるかぶれないかとか、どの辺りだと血が出ちゃうか、どうすれば一筆書きできるかとか、そんなことばかりウキウキ考えて、それで頭をいっぱいにしてます」

このことから、ボディステッチはアームカットと比較し「衝動的」にはできず、そして「時間のある時」でなければならない行為だということが分かる。ボディステッチは、刺繍糸の選択、刺繍する模様の計画、刺繍の実践、全ての過程において自己と対話する性質を持つために「衝動的に」実践することはできないのだ。「内側」へ眼差しを向けるという点ではタトゥーやピアス、リストカットと同様だ。しかし、それらに完全に当てはまることがない独自の過程を持った変工であると考えられる。

まず、タトゥーやピアスのように完成された模様、パーツを購入するのではない。刺繍糸を購入する段階では、ボディステッチは「未完成」である。よって、身体変工自体を「商品」として購入するモダン・プリミティブとは言えない。また、刺繍糸を購入する際も実践者が自分で糸の色を選ぶ必要があり、「私は何色が好きなのか」という対話の機会が生まれている。

次に、ボディステッチを「きれいに」完成させるためには針の通し方や刺す深さなどを考える必要があり、衝動的に行えるリストカットとは異なる。「私はどの深さで痛みを感じるのか」「皮膚から血が出るのか」という対話がそこで生まれているのだ。布に施す刺繍と違いボディステッチは中断ができない。身体には「針山」が存在しないためだ。

また、ボディステッチは「完成」させるまで「内側」に眼差しを向ける必要があるというだけではない。ボディステッチは、手のひらや腕の「内側」部分に刺繍をする。確かに、手のひらや腕の内側は皮膚が薄く刺繍針を通しやすいため、「きれいに」完成させるための場所として適切である。しかし、それらの場所は本当に実益だけの部位だろうか。手のひらや腕の内側は、手を握ったり衣服を纏うことで他者からの眼差しを受けづらい場所でもある。「内側」に施すことも、自己との対話に繋がるのではないか。

したがって、ボディステッチは計画してから完成させるまで自身の身体との向き合いを必要とする。

ボディステッチは、社会への「逸脱」行為でもなく自傷行為でもない、中間領域に位置し

た対話行為である。浮ヶ谷(2010)が述べたように、境界理論において「あいまいな中間領域」に置かれたものがタブー視されることは、ボディステッチの本質的な性質がマスメディアやサブカルチャー(メディア)で表象されなかったことと関連性があると考えられる。また、ボディステッチは、亘(1996)が示した身体の命題「①人間は身体である(beingとしての身体)」の追求行為のひとつだと考えられる。

自身の身体の「内側」という「見せびらかさない」ための部位に刺繍をするボディステッチは、皮膚を通じて自身の身体に触れ、感情に触れ、ステッチのテクスチャーに触れる。「他の誰のものでもない」自身の皮膚に直接干渉しながら、自己と向き合う行為になっているのだ。

おわりに

筆者がピアスやタトゥー、リストカット、ボディステッチについて研究したいと家族に伝えたとき、“奇異”な眼差しを向けられることがあった。そういった眼差しを社会に置き換えて考えると、現代社会において「“良い”身体とはなにか」という疑問が浮かび上がる。これまで述べてきた皮膚の身体変工が“奇異”だとするならば、そもそも“良い”身体とは一体何だろうか。

それは、生理的な現象、「身体的なもの」を排除した身体になることではないかと考えられる。つまり、「清潔」な身体である。

筆者は大学2回生から3回生にかけて、トイレ空間や身体に身に着ける清潔グッズに着目し「現代日本における清潔化」をテーマに研究を進めてきた。筆者は、清潔それ自体を問題視しているわけでない。しかし、「清潔」な空間での人間の生理的な現象は、客観的で科学的な指標によって「きたない」ものとして定義づけられる。そして、自身と他者に対する感覚的に許容可能な範囲を狭め、他者との境界がつくられる。かつて科学者や一部の医者しか知りえなかった細菌の存在は、いまやマスメディアを通じてビジュアル化され、私たちの意識に入り込んでいるのだ。私たちはそういった「きたない」ものを意識から排除するために清潔グッズを使い、自身が「きたない」存在ではないと他者に「見せびらかす」必要を迫られている。無臭(あるいは「石鹸のにおい」といった「清潔」だとされるにおい)で「清潔」な身体相互監視である。

つまり、現代社会に生きる私たちの身体は、他者に「見せびらかし」、認められることで社会的に望ましい“良い”身体になるのだ。

対して、「見せびらかさない」身体は、マスメディアもしくはサブカル(チャー)メディアからは「望ましくない」隠される対象とみなされる。Cさんのように「自傷行為」あるいは「ファッション」あるいは「逸脱」でもない、「説明のしづらい暇つぶし」であるボディステッチの実践は、まさしく「外側」に「見せびらかさない」身体変工のかたちである。現代社会にとってボディステッチは、社会的に望ましい身体変工とはみなされていない。

はたしてそれは身体と身体変工のみに言えるだろうか。私たちの感情、精神も他者への「見せびらかし」の対象ではないか。例えば、「自己啓発」や「自己実現」という言葉で、私たちは他者から見て社会的にどうあるべきか、どうあれば望ましい“良い”人間になれるのか規定されていく。また、インターネット上、とりわけSNSという広大な世界では、世界の情報を享受するだけでなく相互に情報を発信することを可能にした。つまり、私たちの感

情や精神も絶えず他者に「見せびらかす」対象である。高度な情報技術によって私たちの感情や精神を「見せびらかす」ことが容易になっている反面、私たちの生理的な身体現象は「隠す」ことが求められる。

私たちの身体は、感情や精神と分離され、消費社会の中でばらばらに「解体」されながら生きている。自分がどうあるべきかという問いかけも、他者からの眼差しの下で「見せびらかし」、認められることで価値が表れるようになっている。私たちは見世物小屋の観衆であり、それと同時に見世物でもあるのだ。

本論文で対象にした身体変工は「逸脱」としてラベリングされるべきではない。とりわけボディステッチは、社会的に「逸脱」とみなされるアームカットの寸前で押し留まるための行為である。マスメディアによって暴かれた身体変工は、もはや「見世物」に近い位置づけになりつつある中、ボディステッチは身体が「見世物」になることを防ぐ行為だと考えられる。消費社会によってばらばらに「解体」された「私」を見つめ、自身の手でもう一度縫い合わせる行為が、他の誰もない「私」のための身体の再構築に繋がっているのではないか。

【参考文献一覧】

- アーヴィング・ゴッフマン (1974)『ゴッフマンの社会学1 行為と演技 日常生活における自己呈示』石黒毅訳、誠信書房
- アーヴィング・ゴッフマン (1987)『スティグマの社会学 烙印を押されたアイデンティティ』石黒毅訳、せりか叢書
- ジークムント・バウマン (2001)『リキッド・モダニティ—液状化する社会』森田典正訳、大月書店
- マーゴ・デメッロ (2017)『ボディ・スタディーズ—性、人種、階級、エイジング、健康/病の身体学への招待』田中洋美訳、晃洋書房
- メアリー・ダグラス (1983『象徴としての身体 コスモロジーの探求』) 江河徹・塚本利明・木下卓訳、紀伊國屋書店
- 阿部勘一 (2018)「現代社会における身体と身体イメージ」西山哲郎・谷本菜穂編『身体化するメディア/メディア化する身体』風塵社
- 伊藤亜紗 (2020)『手の倫理』講談社選書メチエ
- 石田スイ (2013)『ヤングジャンプコミックス DIGITAL 東京喰種トーキョーグール リマスター版 2』集英社 第42ページ、第48ページ
- 石田スイ (2013)『ヤングジャンプコミックス DIGITAL 東京喰種トーキョーグール リマスター版 5』集英社 第174ページ
- 石田スイ (2013)『ヤングジャンプコミックス DIGITAL 東京喰種トーキョーグール リマスター版 6』集英社 第8ページ、第9ページ
- 浮ヶ谷幸代 (2010)『身体と境界の人類学』春風社
- 岡原正幸 (2013)『感情資本主義に生まれて 感情と身体の新たな地平を模索する』慶応義塾大学教養研究センター選書13
- 樺山紘一 (1996)「割礼と宦官：からだの歴史から現在へ」井上俊也編『身体と間身体の社会学(現代社会学4)』岩波書店
- 谷川渥 (2005)「表象としての皮膚」鷺田清一・野村雅一編『表象としての身体(叢書 身体と

- 文化 第3巻)』大修館書店
- 谷富夫(2009)「ライフヒストリー分析とは何か」谷富夫・芦田徹郎編『よくわかる質的社会調査 技法編』ミネルヴァ書房
- 前田至剛(2018)「自傷する身体を語るメディア・伝えるメディア」西山哲郎・谷本菜穂編『身体化するメディア／メディア化する身体』風塵社
- 亘明志(1996)「メディアと身体」井上俊也編『身体と間身体の社会学(現代社会学4)』岩波書店
- 「ヤングの間で入れ墨がブーム ファッション感覚で専門店で／東京」朝日新聞1995年5月30日付
- 「体で主張? ボディーアート「目立ちたい」違い求め生身を“加工”」朝日新聞1995年8月26日付
- 「リストカット症候群(思春期のストレスクリニック)／福島」朝日新聞1998年7月30日付
- 「銭湯に行きますか?」朝日新聞2020年3月28日付
- 「第2部 よそおう(9) 若者 おしゃれも中性化」読売新聞1992年4月11日付
- 「“茶髪”少年の意外な優しさ」1996年2月16日付
- 「茶髪で解雇は不当」北九州の元運転手が仮処分申請 福岡地裁小倉支部」読売新聞1997年8月28日付
- 「10代の文化(1) おしゃれ通し自分探し」読売新聞1998年11月11日付
- 「いきいき健考人 エイズ 緩む日本社会の危機感 性の知識不十分な若者」読売新聞1999年11月28日付
- 「大阪市環境局入れ墨50人」読売新聞2012年5月13日付
- BUSINESS INSIDER「トラブルを防ぎ生産性をあげるには? 「チャットコミュニケーション」12の鉄則」2020年4月18日記事 <https://www.businessinsider.jp/post-211201>
(最終閲覧日2021年1月14日)
- DOTT「刺青・入れ墨・タトゥーの違いとは | 彫り物・紋々の定義と歴史」2018年1月17日記事 <https://do-tt.jp/social/tattoo-and-irezumi/> (最終閲覧日2020年12月1日)
- FASHIONSNAPE.COM「全身タトゥーモデルのRick Genest、コンシーラーで全身覆い素顔を公開」2011年10月29日記事
<https://www.fashionsnap.com/article/2011-10-29/rick-genest-dermablend/> (最終閲覧日2021年1月14日)
- Google Trends
<https://trends.google.co.jp/trends/explore?date=all&geo=JP&q=%E3%83%9C%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%83%E3%83%81> (最終閲覧日2020年11月13日)
- LITALICO発達ナビ「自傷行為とは? 痛くても行う理由や精神障害との関係、具体的な止め方、周囲の適切な対応を解説します」2017年6月22日記事
<https://h-navi.jp/column/article/35026417> (最終閲覧日2021年1月31日)
- TVアニメ『東京喰種 トーキョーグール』公式サイト
<https://www.marv.jp/special/tokyoghoul/frst/index.html> (最終閲覧日2020年12月16日)
- 京都国立近代美術館「都築響一(選)《ニッポンの洋服》テキスト完全版」

<https://www.momak.go.jp/Japanese/433/tsuzuki.html>（最終閲覧日 2020 年 12 月 1 日）
コミックナタリー「人を捕食する怪人描く新連載「東京喰種」がヤンジャンで」2011 年 9 月 8
日記事 <https://natalie.mu/comic/news/56201>（最終閲覧日 2020 年 12 月 1 日）
ボディステッチ「ボディステッチ」
<https://ameblo.jp/xxx-xxxx-xx/>（最終閲覧日 2020 年 12 月 1 日）
迷子の行方「ボディステッチ」
http://blog.livedoor.jp/maigo_atesaki/（最終閲覧日 2020 年 11 月 28 日）

注

- ¹ A さんの調査期間は 2020 年 7 月 10 日から 2020 年 7 月 12 日、2020 年 12 月 4 日から 2020 年 12 月 8 日の計 8 日。
B さんの調査期間は 2020 年 12 月 1 日から 2020 年 12 月 11 日の計 11 日。
C さんの調査期間は 2020 年 12 月 9 日から 12 月 17 日の計 9 日。
- ² B さんは、上に挙げた変工行為のほかに派手髪（髪の毛を奇抜な色に染めること）も実践している。しかし、本論文での身体変工の定義からは外れるため、この図表においては割愛する。